トロントだより

電子制御工学科　玉木　隆幸

カナダ最大の都市であるトロントは、日本でいえば旭川とほぼ同じ緯度に位置しており、夏場の平均気温も22度程度と奈良県よりも5度ほど低く、この季節は快適に過ごすことができます。そして、冬場には気温マイナス10度以下になる日もある反動からか、日の出から日の入りまで15時間もあるこの季節、トロントニアンは街中に点在する芝生の上での日光浴を楽しんでいます。

平成22年3月20日より1年間在外研究のため派遣されているトロント大学においても、学内には芝生が生い茂り、夕方には、学生達（ときに教授達も）は、サッカーを楽しんでいます。このサッカーには、世界中からトロント大学に集まった学生達が一緒に楽しむことができる数少ないスポーツとしての位置づけがあるようです。

つまり、大学には本当にさまざまな国から多くの学生が集まっていることを表しています。研究室にもカナダ出身の学生数を凌ぐ中国、ドイツ、イラン、ポルトガル、タイなどからの留学生が在籍しています。

そして、国籍とは関係なく2、3人からなる研究チームを組み、それぞれの研究テーマに関する実験などを行っています。今回の在外研究のテーマについては、イラン出身の学生さんとチームを組み、研究を行っていますが、実験の進め方などに違いがあるとお互いに少し興奮することになります。結果として、お互いに良いと思える意見を言い合い、お互いに納得するまで議論することになるのですが、そういう日はいつも以上に目的意識をもってスムーズに実験を終える傾向にあります。そして、議論する大切さと、相手を納得させる意見をどのように考え、どのように伝えるかを学ぶことになります。

残りの研究期間も、奈良高専から頂いた在外研究の機会に感謝し、なお一層研究に励み、多くの知識・ノウハウを学び、文化交流、人的交流に繋がる実り多き在外研究になるよう努力したいと考えています。

シンガポールだより

機械工学科　谷口　幸典

十ヶ月間の客員研究員としてシンガポール生産技術研究所（SIMTech）に赴任しております。Nanyang工科大学の敷地内に構え、ものづくりを専門とする国内外博士研究者が百名以上在籍して、「シンガポール工業のための研究開発」という方針の下に先端研究の立案や人材育成を遂行している政府機関で、学生時代のように研究に取り組ませていただいております。

その交流の中で感じさせられるのは、高等教育を修めた者の役割です。的を射ないですが、「人が安心に人生を全うできる豊かさを、専門知識を通じて創出維持する。そのための知恵を絞る」ことでしょうか。

この国の学生を観察していますと、広大なキャンパスの食堂やアメニティ、あるいは通学時の混みあったバスや電車内でも、学術論文を読んだり力学の問題に取り組んだりしている光景があります。週末ふと立寄った公立図書館は小学生も含めて若者で溢れ、床に座ってまで勉強している様相には驚きました。そのはず、小学校から国家主導で能力別クラスが実施されており、大学進学率は20%程度という狭き門。そして次点となる教育機関が、高専と同様に高校生の年代から技術者や技能者の育成を担うポリテクニック校で、広範囲な分野で専門技能を有する若者を大規模な環境で効率的に輩出・活用しています。

近年のシンガポールの経済成長の一翼を担っているのは製造業であり、技術開発や人材育成を政策が強力に後押ししていると感じます。日本人からすれば顕著な競争～格差社会であることも実感します。けれども街ゆく人々からはそれぞれの生活スタイルで楽しむ一様な心の豊かさも感じられます。

駅などでポリテクのTシャツを着た学生をよく見かけ、その姿に学舎の誇りを垣間見た時、我々、高専教職員の役割が今改めて強調されている気がします。